

2019年度を迎えて

院長 山寺 陽一

さわやかな風が吹き渡る季節となりました。地域の皆様には、日頃より当院の運営に対して、何かと御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございます。

当院では4月1日に33名の新入職員が入所し、新年度のスタートを切ったところであります。今年は、5月1日に新天皇陛下がご即位され、「令和」元年となり、例年にも増して新たな気持ちで新年度を迎えられたような気がしております。そして改元に伴い、異例の10連休となりましたGWも、救急医療体制に加え、4月27日、5月2日の2日間、通常診療日を設け対応させていただきました。皆様方にご迷惑をおかけするような大きな混乱もなくほっとしているところです。

近年我が国は、少子高齢化、財政悪化などいろいろな問題をかかえており、それに伴い医療提供体制も大きく変化しております。政府は、医療費抑制の目的でこれからの医療体制として地域包括ケアシステム（病床を削減して在宅医療に移行する。）を推進してきておりますが、これに対して不安を感じておられる方も多いと思われまふ。当院では、昨年から試行してきました入退院支援業務を、今年度開設する「総合サポートセンター」において本格的に取り組む計画です。退院後の療養環境（訪問診察、訪問看護、介護保険サービスなど）も含めて皆様に満足していただける医療を継続して提供できるように、多職種の職員で対応させていただきます。いずれはよろず相談窓口的な機能も併せ持つようにしたいと考えております。

もう1つの話題です。平成16年に卒後臨床研修制度が開始となり、その後しばらくの間当院への大学からの派遣医師が減っていたのですが、ここ2～3年は若い先生方が赴任され、病院全体に活気がみなぎっております。そしてなにより診療の戦力もアップしてきておりますので、今まで以上に皆様方のお役に立てるものと思っております。

今年度も、安心できる良質な医療を提供し、心ふれあう人間味豊かな対応を目指して職員一同努力してゆくつもりです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2019年度病院運営目標

1. 効率的で機能的な病院運営

- * 入退院センターを早期に軌道に乗せ、入院時から退院まで効率的な病棟運営を目指す。
- * DPCデータを活用し、患者様にとってより効果的な診療を提供する。

2. チーム医療と急性期医療の展開

- * 多職種の力を結集し、質の高い安全な医療を提供する。
- * 急性期を担う中核病院として、各診療科がより専門的、高度な医療を提供する。
- * 専門的医療を提供するにあたり、認定看護師・特定行為看護師の力を活用する。

3. 安全・安心働きがいのある病院

- * 改正労働基準法「働き方改革」に対応し、職員にとって働きがいのある病院を目指す。

80列CTを導入しました

診療放射線室 室長 縄 重 亨

当院では今まで 2 列CT と 16 列CT の 2 機種を使用して画像診断を行ってきましたが、機器の契約終了と耐久年数の終了で 2 台のCT を共に更新する事となりました。しかしながら、2 台を一度に更新しますと患者様にご迷惑をお掛けしてしまいますので、2 列CT を先ず更新し、次に 16 列CT を更新する事としました。



今回の 2 台は患者様により優しく、安心して、高画質な画像を提供する事を目標としてキャノンメディカル社製 80 列CT「Aquilion Lightning」と「Aquilion Prime SP」を採用しました。

2 列・16 列から 80 列と言う数字を見ただけでも、違うと言う事が分かりますが、数字だけでなく前機種とは様々な違いがあります。

2 台共通の特徴ですが、80 列にした事で細かなデータを高速に撮影出来る様になります。高速に撮影出来る事で息を止める時間が短くなり、患者様の負担が軽減されます。

更に、患者様の負担軽減で言えば、被ばく線量でも負担軽減が出来るようになりました。それは、最新技術の新 X 線光学技術ソフト「ADD3D」を使用している事で可能になっています。検査部位や検査目的によって違いますが、従来の被ばく線量の半分を目指す事が出来ます。

もう 1 つは、体内に金属が入っている患者様の撮影をする時に、この金属が邪魔をして周辺の画像が出ない場合がありますが、これも金属低減ソフト「SEMAR」を用いる事で、周辺の組織を鮮明に写し出す事が出来る様になっています。

今回、80 列CT という高性能機種の導入は、画像の質向上だけでなく、患者様の負担軽減を考えての結果です。

新しく導入しました機器を使用し、当院の理念であります、「やさしく・親切・ていねいに」を忘れず、病気の早期発見・早期治療ができ、地域医療にも一層貢献できる検査を行なってまいります。



がんリハビリテーションについて

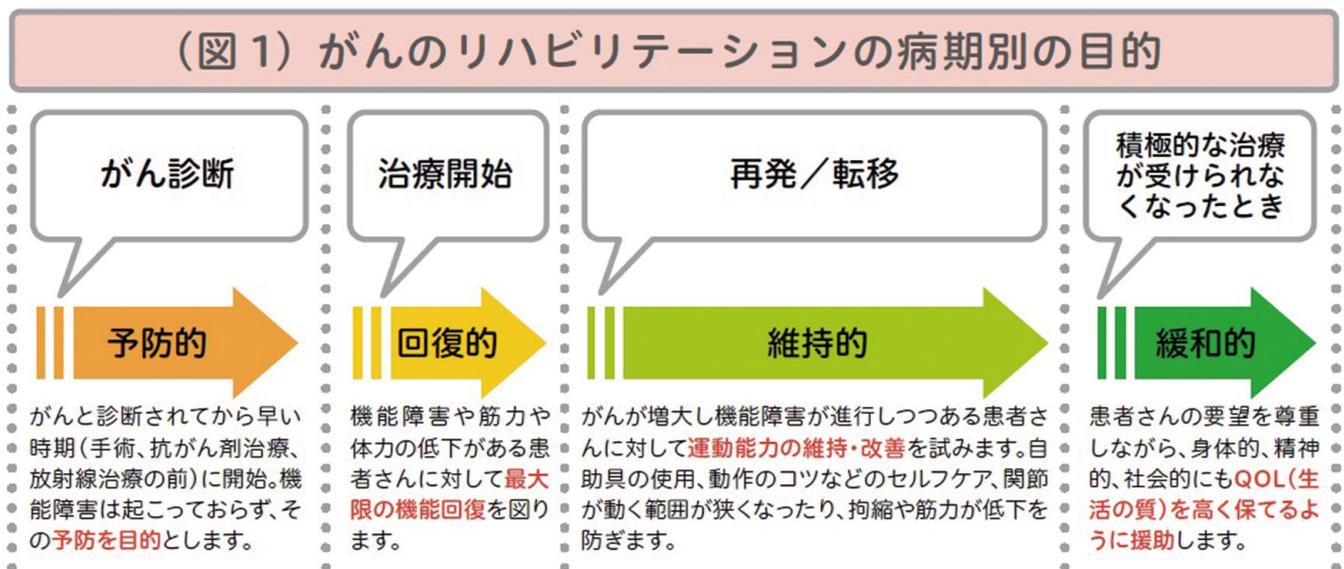
理学療法士 副主任 種市隆司

がん患者様を対象にしたリハビリは2010年に診療報酬で認められるようになり、治療過程における「障害」に対してのリハビリとして見直され始めました。

当院では2015年5月より、入院されているがん患者様を対象とするリハビリテーションを開始しました。認識は徐々に浸透しつつありますが、がんを対象にしたリハビリは、どのようなことを行うのかイメージすることが難しいかもしれません。リハビリとは、脳卒中や骨折などによって障害を抱えた方に対し、運動機能の回復、日常生活に必要な動作の獲得を目指すものとイメージされるかもしれませんが、がんに対しても同じようにさまざまな効果を期待できます。

がんの療養におけるリハビリは、患者様の回復力を高め、残っている能力を維持・向上させ、今までと変わらない生活を取り戻すことを支援することによって、生活の質(QOL:クオリティー・オブ・ライフ)を向上させる考え方に基ついて行われます。がんになると、がんそのものや治療に伴う後遺症や副作用などによって、患者様はさまざまな身体的・心理的な障害を受けます。がんリハビリテーションは、がんと診断されたときから、障害の予防や緩和、あるいは日常生活に必要な動作(起き上がる・立つ・歩く・トイレ動作・段差を昇るなど)の回復や維持を目的に、あらゆる時期や状況に応じて対応していきます。

(図1)



例えばこんな場合に…

手術後の合併症予防、体力回復、乳がん術後の肩関節拘縮予防、リンパ浮腫予防、化学療法後の体力低下の改善、長期間安静による日常生活動作能力の低下の改善、リンパ浮腫の軽減、骨転移に対する動作指導など

がんそのものによる痛みや食欲低下、息苦しさ、だるさによって寝たきりになったり、手術や抗がん剤治療、放射線治療などを受けることによって、身体の機能が落ちたり損なわれたりすることがあります。このような状況になったときに、「がんになったのだから仕方がない」とあきらめる人が多いかもしれません。また、さまざまな障害を抱えることによって日常生活に支障をきたし、家事や仕事、学業などへの復帰も難しくなります。そうすると、QOLも著しく低下してしまいます。しかし、がんになってもこれまでどおりの生活をできるだけ維持し、自分らしく過ごすことは可能です。そのために欠かせないのが「がんリハビリテーション」です。

当院においても、消化器がん・乳がんの手術後の体力の回復や抗がん剤治療後、日常生活に支障をきたしてしまっただけでなく、日常生活動作の再獲得を目指し、医師、看護師、社会福祉士、緩和ケアチームなど様々な職種との協力のもと、患者様、ご家族を支援する一端となれるよう取り組んでいます。

「心の元気」を取り戻すために

公認心理師 副主任 河西みき

—臨床心理室より、緩和ケアチームでの活動と『公認心理師』の仕事についてのお知らせ—

臨床心理室では、公認心理師が院内の緩和ケアチームのメンバーの一員として活動しています。医師、緩和ケア認定看護師、化学療法認定看護師、薬剤師、作業療法士、理学療法士、医療ソーシャルワーカーや精神保健福祉士など、さまざまな職種の人達とのチームの中で連携しながら、患者様やご家族のお話をうかがっております。

がんなどの病気を抱えると、誰しも、驚き、ショックを受け、将来を不安に思ったり、怖く思うなど、言葉では言い尽くせないほどのつらい気持ち、「心の痛み」を抱えることがあります。私達は、治療の過程で生じるさまざまな心の痛みを和らげることができるよう、患者様やご家族のお話をゆっくり、丁寧にかがいます。同時に、病棟スタッフや緩和ケアスタッフと連携して、患者様が安心してよりよい療養生活を送ることができるように関わります。

患者様やご家族の立場になってみますと、相談をすること自体にも不安や迷いが生じ、勇気がいると思います。どうぞお気軽に、まずは主治医や身近な看護師、緩和ケア認定看護師などにお声をかけていただき、ご相談ください。

さて、当院の臨床心理室には3名の『公認心理師』が勤務しています。『公認心理師』という名前を初めて聞いたという方もいらっしゃると思います。『公認心理師』は日本で初めてできた心理職の国家資格で、国民の皆様の心の健康の保持増進に寄与することを目的としています。

皆様には「臨床心理士」という方が心理職の資格として聞き覚えがあるかと思います。私たちは長い間この「臨床心理士」という認定資格をもちながら、心理職の資格が国家資格化されることを待ち望んできました。約30年の経過を経て、2015年によりやく公認心理師法が成立し、2017年に施行されました。そして2019年、今年の2月に『公認心理師』資格を取得し、気持ちを新たに日々の業務に励んでいるところです。

現代は、自然災害後や事故後の心の問題、子どもや高齢者への虐待の問題、労働者の健康の問題、若い世代の自殺などが増えており、私達をとりまく社会における心の問題は大変深刻になっています。身近には、家庭のこと、子育てのこと、学校のこと、職場のこと、自分の特性のこと、対人関係のこと、病気のこと等々、さまざまな不安や悩みを抱える人が、子どもから大人までとも増えています。

私たち公認心理師は、心理学の知識や技術を活かして、心にさまざまな悩みを抱える患者様やご家族、また、患者様を支援するさまざまな職種の人たちと関わっています。患者様の心理的な状態を客観的に把握し、どのような支援が必要なのかをアセスメントしたり、患者様やご家族のお話を継続してうかがい、共に考えていくことで、患者様が不安や悩みの対処方法を見つけられたり、自分らしい生活を再発見することができるように心理的支援をしています。

具体的な業務内容は、精神科外来や精神科病棟において主治医より依頼を受け、心理相談や心理アセスメントを行ったり、精神科病棟や精神科デイケアでの話し合いや音楽療法などの集団療法を行っています。また、小児科外来において発達検査やプレイセラピーを行うほか、さまざまな診療科の先生方より依頼を受け、患者様の身体的な病気から引き起こされる心理的な不安の相談に応じています。

心と身体は密接に関係していて、身体の不調を抱えることで、気持ちが以前のように元氣になれなかったり、色々なことを楽しむ気持ちがもてなくなることがあります。また反対に、心に不安や悩みを抱えることで身体の不調がおきてくることもあります。心身の不調によるさまざまな不安や悩みを一人で抱えている患者様がいらしたら、私たち公認心理師とお話してみませんか。患者様が心の元氣を取り戻すことができるようお役に立てる臨床心理室でありたいと思っています。



総合サポートセンターの紹介

看護管理部 部長 丹 沢 早 苗

総合サポートセンターは、予定された手術・検査・治療が必要な患者様を、入院前から退院後まで、住み慣れた地域で継続し生活ができるように、安全で安心した医療・看護をサポートして行くことを目的としています。

これまでは、病気・検査・治療（手術）の説明を外来診療とともに行ってきました。そのため、待ち時間が長くなるだけでなく、患者様やご家族の不安や疑問等への十分な対応ができないまま入院当日になっていました。このような対応を解決するために平成30年10月に開設しました。

総合サポートセンター「入院支援室」「退院調整室」には、看護師・社会福祉士・薬剤師・栄養士・クラークが所属し対応しています。

<総合サポートセンターのおもな業務>

- ◆入院時の病歴と基本情報の聴取
- ◆入院時スクリーニング（問題の早期介入に向けて）
- ◆医療相談
 - 入院費について（医療費の限度額申請など）
 - 退院後の生活に向けて（福祉サービスの利用）の相談支援
- ◆入院の手続き、入院生活の案内
- ◆再診・麻酔科診察・検査予約の案内
- ◆術前準備として薬の指導・手術・検査の前処置の説明
 - 安全に検査や治療が受けられる準備
- ◆入院支援カンファレンスの実施
 - 情報を共有し入院直後から多職種と協力のもと、その人らしい安心・安全な生活ができるよう支援する。

現在は、消化器外科・乳腺外科・循環器内科の対象患者様から始めていますが、近い将来は、ハード面の整備を行ない全科に対応できることが目標です。

新入職員を迎えました



当会では2019年4月1日付で保健師1名、看護師22名、准看護師1名、薬剤師1名、臨床検査技師2名、作業療法士1名、視能訓練士1名、管理栄養士1名、社会福祉士1名、事務2名、計33名を採用致しました。

当会の理念である「やさしく・親切・ていねいに」の気持ちを常に持ち続け、各配属部署において、患者様をはじめ地域社会に少しでも貢献できるよう新人33名を含め、職員が一丸となり協力し合い、研鑽に励む所存です。何卒宜しくお願い致します。

新着任医師紹介



植田重信 医師（糖尿病内科）

4月から糖尿内科に勤務しています。関西出身で六年前に山梨県に引っ越してきました。桃やブドウがおいしく、富士山の景色が気に入っています。

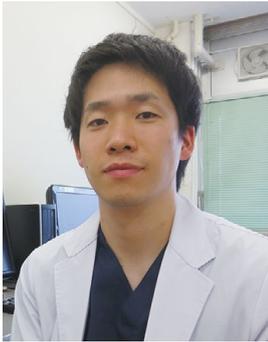
一般内科、回復期リハビリ病棟、長期療養病院の勤務歴があり、六年間の二次救急対応の診療に一番苦労しました。

食事療法が糖尿病治療で一番大切です。血糖を下げる薬の種類が増え、その人に適した薬の使用を目指します。インスリン注射が必要になる患者さんが増加しています。注射開始が遅れないよう充分説明をしていきます。



小田切奨太 医師（耳鼻咽喉科）

今年度4月より、山梨厚生病院耳鼻咽喉科へ赴任いたしました小田切奨太です。山梨県の出身で、山梨大学を卒業後、大学病院や市立甲府病院で勤務をしてきました。耳鼻咽喉科は小児から成人、ご高齢の方まで幅広く受診される科です。病気もさまざまなものがあります。自分のこれまで学んだ知識を基に、皆さんの病の訴えを聴き、適切な検査の提案、内科的治療そして必要な際は外科的治療のご提案をさせて頂き、地域医療に耳鼻咽喉科専門医として貢献できるよう努力していきたいと思っております。



樋口雄大 医師（外科）

初めまして。四月から着任致しました外科の樋口雄大と申します。私は山梨大学を卒業後、初期臨床研修の2年間を東京都内の病院で修了して参りました。当初は華やかな都会を離れ、地元に戻ることをいささか心寂しく感じておりましたが、いざ帰ってくると旧友や家族、見慣れた風景に心癒され、己はやはり生粋の山梨県民なのだと思われ再認識させられる今日この頃です。環境はがらりと一変しましたが、医療の本質というものはどこで働こうとも変わらぬものだと思っています。患者様に対する思いやりや、向上心を常に忘れず、一つ一つ丁寧に診療に当たって参りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



下浦雄大 医師（循環器内科）

2019年度4月より山梨厚生病院内科に勤務いたしております下浦雄大と申します。大阪府出身で学生時代から山梨県で生活しております。農作物のための準備や収穫の話で季節の変化を知り、季節毎に祭事が多い山梨の風土に親しみを持ち9年が経ちました。同じ病名の患者さんに対して、循環動態や既往歴、発症してからの時期によって介入方が変わっていく循環器診療に興味を抱き内科全般を勉強中です。

山梨県東部の医療を支える山梨厚生病院での医療業務を支える一員になれたことに誇りを持ち、日々研鑽を積みたくと考えています。何卒よろしくご厚意申し上げます。



岡藤麻未 医師（小児科）

5月より山梨厚生病院に赴任いたしました、岡藤麻未と申します。私は東京都小平市出身で、山梨大学を卒業し山梨大学医学部附属病院で初期研修を行い、その後は小児科医として山梨大学医学部附属病院と山梨県立中央病院で後期研修を行ってきました。山梨県での生活が10年になり、自然豊かで温かい山梨が第二の故郷になりました。

小児科としては4年目になり、様々な勉強をしていくことが多い毎日ではありますが、池田先生、小林先生をはじめ小児科の先生方、職員の方々に大変お世話になり、充実した日々を送らせて頂いております。地域のお子様方の健やかな成長のために、研鑽を積んでいきたいと思っております。どうぞよろしくご厚意いたします。